

「この福音は、あなたがたが神の恵みを聞き、それをほんとうに理解したとき以来、あなたがたの間でも見られるとおりの勢いをもって、世界中で、実を結び広がり続けています。福音はそのようにしてあなたがたに届いたのです。」(コロサイ 1:6)

【巻頭言】

「包括的な宣教協力アプローチ」

日本ローザンヌ委員会 青木 勝

「あなたがたの歩みをよく考えよ。---あなたがたがそれぞれ、自分の家のために走り回っていたからだ。さあ、あなたがたは今日から後のことをよく考えよ。---まだ実を結ばないのか。今日から後、わたしは祝福する。」(ハガイ書 1:5、9、2:18、19)

「最後に申します。あなたがたはみな、心を一にし、同情し合い、兄弟愛を示し、あわれみ深く、謙遜でありなさい。悪をもって悪に報いず、侮辱をもって侮辱に報いず、かえって祝福を与えなさい。あなたがたは祝福を受け継ぐために召されたのだからです。」(1ペテロ 3:8~9)

阪神淡路大震災から25年余り、東日本大震災から10年余り、警戒される首都直下型地震や南海トラフ地震へ対応するべく、災害時の医療支援体制が整備されてきた。そして、SDGs2030(国連の持続可能な開発目標)に向けた被造物ケアは、新型コロナウイルス感染症拡大に伴い複合災害(CHE: Complex humanitarian emergencies)から「新常态 New Normal」への移行として展開されている。

社会変革・社会貢献につながる宣教協力は、エジンバラ宣教会議から100年になる20世紀末から21世紀初頭に加速されてきた。次世代アーキテクチャーであるCPS(Cyber Physical System)は、自動車などの基幹産業やインフラ整備、更に災害時の医療支援を行政と共に支えるネットワークに適用されている。

ローザンヌ運動におけるLCWE3(2010)~LCWE4(2024以降)、日本福音同盟(JEA)におけるJCE6(2016)~JCE7(2023)~JCE8(2030)という超教派ベースの内外ネットワーク整備に伴い、21世紀における社会変革・社会貢献に取り組む多様なアプローチが包括的に共創されて行くには、信徒主体の受け皿整備が益々求められる。(LCWE: Lausanne Congress on World Evangelism)

21世紀の20年余り分断や格差が拡大する中、SDGs2030をめざす次世代アーキテクチャーの開拓は、Mobilityを中核とした回復や再生アプローチへ拡大している。スターター・ベンチャーは、心の哲学におけるユヴァル・ノア・ハラリ(イスラエルの歴史学者)やマルクス・ガブリエル(ドイツの哲学者)などのアプローチをも視野に入れ、社会変革・社会貢献につながるビジネス開拓に挑戦している。

21世紀は宇宙時代や100歳時代でもあり、強靱な変革から創造的破壊(Resilient innovation to Disruptive innovation)を支えるビジネス宣教協力が取り組まれている。コロナ禍という例外なしパンデミックによる終活・就活を通して、公私にわたる連続したブレイクスルーに取り組みつつ、Great Resetの先に持続可能な成長を展望して行くことが期待される。

「世の中から求められているもの、世の中に役立つものは何か」、そして「主に喜ばれ、人に喜ばれることは何か」を捉え続けていきたい。福音伝道と社会的責任を担い支える宣教協力の包括的アプローチとして、「国際平和につながる国際協力を支える宣教協力」、「全世界の罪を贖い、主の平和がもたらされる宣教協力」の探求は続けられる。「多文化共生社会における共存・協働により復興・再生から予知・予防をめざす次世代アーキテクチャーの開拓」が拡大される。牽引とケアの包括的アプローチを通して祝福を受け継ぎ、受け皿共創による新しい文脈開拓に励みましょう。

(インマヌエル中目黒キリスト教会員)

【JMRレポート】

今回のJMRレポートは、コロナ禍関連として、アジアアクセス主催「第7回新型コロナウイルス対策セミナー」の参加者に対し、コロナ禍において、教会の教勢報告に対する影響と変化についてアンケート調査を行ったデータを、アジアアクセスのご好意により提供していただき、それをもとに作成した結果と、「『新常态(New Normal)』に対応した宣教方策と教会形成」と題した日本宣教リサーチ(柴田)の私案を併せて掲載いたします。また、『中外日報』のオンライン情報からも、記事を転載させていただきます。

「第7回新型コロナウイルス対策セミナー」アンケート集計結果 (アジアアクセス・ジャパン提供のデータを日本宣教リサーチが集計)

【調査概要】

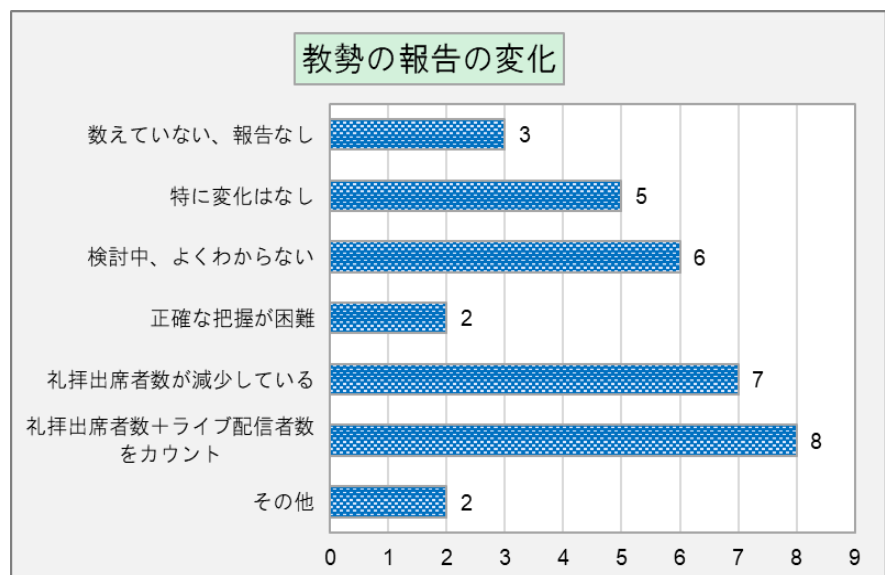
- ・方法: インターネットによるWEBアンケート
- ・実施日: 2020年12月8日(木) ・有効回答数: 33名

【回答者】

都道府県名	牧師・宣教師	スタッフ	神学生	信徒	都道府県名	牧師・宣教師	スタッフ	神学生	信徒
北海道	1				滋賀県				
青森県					京都府				
岩手県		1			大阪府	1			
宮城県					兵庫県	5		1	
秋田県					奈良県	1			
山形県	1				和歌山県				
福島県					鳥取県				
茨城県	4			1	島根県				
栃木県					岡山県				
群馬県					広島県				
埼玉県	1			1	山口県				
千葉県				1	徳島県				
東京都	3				香川県				
神奈川県	5				愛媛県				
新潟県					高知県	1			
富山県					福岡県		1		
石川県	1				佐賀県				
福井県					長崎県				
山梨県					熊本県	1			
長野県					大分県				
岐阜県					宮崎県				
静岡県	1				鹿児島県				
愛知県					沖縄県				1
三重県					海外				
					計	26	2	1	4

【回答】(Q1, Q4.は省略)

Q2. コロナ禍で、教勢の報告に変化がありましたか？
あれば、どのような変化があったでしょうか？



Q3.このような変化を通して、教会の成功の定義など、考えが変えられたことなどありましたら、お書きください。

- ・人数が多ければ良いというものではない。イエス様の姿、働きを見させられた。真にイエス様を愛し、イエス様にささげて行く人と牧師自らがなり、そのように信徒を整えていくことが教会の成功と思われています
- ・コロナ禍より前から、教会の使命は、キリストの教会誕生以降、その本質を保つことにあって、共同体の人数は、御霊の導きで、その置かれた時代／場所／状況によって変化すると理解している。共同体のリーダーが「本質を維持する」ことに集中するか、「群れを維持する」ことに集中するかで、結果的には「教勢：神の国の真の広がり」に影響が出るものと考えている。
- ・確かに礼拝堂には来て座ってはいけれど、弟子ではなかったのだなと感じています。同時にこれまでどれくらい弟子を作る気が教会にあったのだろうかとか根幹を問われているように感じています。ある意味で今こんな状態であろうとも、誠実に主を慕い求めて礼拝を捧げている人が弟子であり、さらに弟子とされていくのだなと感じています。その中心的なこと以外で信徒を満足させてはいけないなと感じています。
- ・漠然と持っている「教会の成功の定義」は「成長すること」だと考えています。人数という指標は客観的で便利だと思っていましたが、コロナ禍ではその指標があまり役に立たなくなると感じています。
- ・教会の意味を改めて考えさせられた。一同に会することも重要であるが、信仰者が様々な方法で交わりを持つこと、仕え合うことで、キリストの身体として生かされることが大切であると思われている。
- ・若者達が、オンラインに疲れ果てているように見え、実際に会って交わることに喜びを感じ、集まることに積極的になっていると思う。逆に大人達が、オンラインの便利さに気付き、集まることに消極的になっている。お陰で、若い世代が自然に教会でリードする様になってきていると感じる。教会の成功の定義は、一度にたくさんの人達を抱えることができる、バランスの取れた教会だった時代から、後からでもリポートしてみたくなるような、内容の深い礼拝を行う教会へと変化していると思う。
- ・ひとつの教会、会堂に何人集めることができるかのような成功定義ではなく、家族をはじめとし、教会のメンバーが置かれているところで、さらに福音を届け、教会がネットワーク的に広がっていけるか、そのために一人ひとりの聖徒をどのように整える働きができるか…そんなことをより考えるようになりました。
- ・従来は、現住陪餐会員数や礼拝出席者数等、実際に「教会に集まった人数」によって教会の教勢、成長が計られてきたが、今後は「教会と繋がっている人数」の把握が重要になると思う。教会としても、従来の内向き・孤立化を排し、いかにして建物としての教会外部の人（高齢者や身体的、時間的な事由で礼拝出席が困難な人や教会難民、キリスト教シンパ、キリスト教系学校の卒業生、その他助けを必要としている人等）と繋がっていくかを考える必要がある。

Q5.2021年以降、新型コロナ対策ウェビナーを継続するか検討中です。皆さんのニーズやご希望、あるいは、過去のウェビナーで受けた恵みなどを自由にお書きください。

- ・月に1度、もしくは二月に1度で良いので継続を希望します。準備は大変な労力と思いますが、このような交わりの機会が少ない状況の中で、このウェビナーはパネリストの先生たちのお話を伺うことができ、さらにはそのことをテーマに同労者たちと分かち合い、励ましあうことができる機会となっています。
- ・このウェビナーがなかったら、このコロナ禍で孤独感を感じて、こんな牧会でいいのだろうか、こんな舵取り、教会形成でいいのだろうかとか不安な思いに常に駆られていたのではないかと感じられます。若輩者として先生方の励ましの言葉、また正直な証や Zoom ミーティングでの分かち合いに助けられました。
- ・「日本国内における世界宣教」に想いが与えられ、働きをされている方、または教会の声(証)を聞いてみたい。
- ・コロナ禍でこれまで教会が取り組んだ事柄の評価。成功や失敗について。
- ・たくさんの知恵をいただき感謝しています。コロナ禍の中でも教会は集まる事を止めず、主を礼拝し続けていますので、受けた恵みを教会に還元する様に努めたいと思います。ニーズは、コロナ禍の中で希薄になりがちな人間関係において、どのようにして交わりを保っていますか？
- ・オンラインチャーチは、数年前から存在していて、引きこもりや入院中の方のため、近くに教会のない方のために用いられてきた。これから、開拓をすることを考える際、オンラインチャーチの形だけを取り入れて開拓することは有りか無しか。
- ・コロナ禍の中、ウェビナーを受け、それをもとに祈りつつ考えさせられる中で、教会にどれだけ集められるか…という宣教から、教会からそれぞれが派遣されていくという宣教…という考え方へシフトチェンジできたこと、また、そのために、牧師が聖徒を整える働きを中心にしていくことが、なによりも必要だと言うことに気付かされ、現在、それを具体的な形にしていく方向に進むことができているのが、ウェビナーから受けた大きな恵みです。

1. 「新常態 (New Normal)」における教会活動

「新常態 (New Normal)」による教会活動への影響としては、次のようなことがあげられる。

- ① 従来の教会活動に対し、会堂を中心とした「3密」の回避や、「不要不急」の移動の自粛等により活動の制限、見直しが余儀なくされ、リアルな対面式とオンラインによる非対面式の併用等による新たな「活動様式」と「行動変容」が求められている。
- ② 従来は、個々の教会において「見える教会」の形を整え、維持しつつ、何とかして形をより大きく、より増やす努力がなされ、その成果によって成長の度合い等が計られてきたと言える。
しかし、「新常態 (New Normal)」においては、「見える教会」の形が蝕まれ、分断や離反等によって形が崩れ、「見えない教会」「教会難民」化が進むのではないかと推測される。その結果、教会によっては存続や維持が脅かされる事態に陥ることも懸念される。
また従来は、実際に「教会に集まった人数」によって教会の教勢や成長が計られてきたが、今後は「教会と繋がっている人数」の把握が重要になると思われる。
*「見える教会」: 教会籍のある人からなる教会
「見えない教会」: 普遍的な教会。教会籍がない信仰告白者を含む。
「教会難民」: 教会籍はあるが「別帳会員」等、何らかの事由で教会から遠ざかっている人
- ③ 「コロナウイルスにおいて神は、現状に根を下してしまっている世界中のキリスト者を、これまでのあり方から解き放ち、何か抜本的に新しい働きを行わせ、また、世界の未伝の人々のもとに、キリストの福音を携えて送り出そうとしておられる。」 (ジョン・パイパー『コロナウイルスとキリスト』)

2. 「新常態 (New Normal)」に対応した宣教方策と教会形成

(1) 従来の宣教方策や教会形成の見直しと新たな宣教観、教会観の確立

- ・地域から孤立した会堂中心の「内向き」の教会形成
⇒ 地域に開かれた「外に向かって出て行き、神と人とを繋ぐ」教会の形成
- ・会堂での集会やイベント中心の宣教
⇒ 信徒の家庭等で、スモールグループ(家の教会やセル等)を中心とした会堂の外での宣教や交わり、
宣教団体やキリスト教系学校等との連携による繋がり方の強化
- ・教職を中心とした宣教
⇒ 弟子化された信徒の実生活を中心とした宣教・交わりが、今まで以上に重要となる。
- ・「集まれる人」中心の教会 ⇒ 「集まらなくとも繋がっている人」の教会
- ・「自教派・自教会のみに目を向ける」教会 ⇒ 「広く日本・海外に目を向け、繋がる」教会

(2) 「新常態 (New Normal)」に対応した宣教方策と教会形成

- ① 核となる現住陪餐会員 (0.4%) のキープ
 - ・従来のリアルな教会活動に加え、デジタル化、IT化ツールにより教会員との繋がりをキープする。
* 非デジタル対応層 (高齢者等) への対応が必要
- ② 「教会難民」 (0.4%) のフォロー
 - ・スモールグループ(家の教会やセル等)を中心とした宣教や交わりの拡大
- ③ 「自称クリスチャン」「キリスト教シンパ」層 (4~6%) への宣教
 - ・地域住民に対し、「礼拝やみことばのネット配信」とともに、地域住民の関心があるテーマや今の時代が必要とするテーマに関する講演のコンテンツ等を「キリスト教メディアセンター」から配信したり、学習会、趣味の教室等を開催したりして、地域の人と神とを繋ぎ、隠れクリスチャンから一歩進めた「ネット会員」「Web会員」として取り込むことにより、「神の国の拡大と深化」を図る。
* 「キリスト教メディアセンター」と地域教会との連携による取り込み方の検討
* 地域教会においては、神と人とを繋ぐ「繋がり力」の強化が必要
 - ・真に神を畏敬し、霊的に深みのある礼拝(特に、また聞きたくなるようなみ言葉の真摯な説教)の配信
 - ・人生相談・カウンセリング等による心のケアや援助、地域のニーズに応える講演会や学習会等の開催
 - ・キリスト教葬儀や教会墓地(納骨堂)の整備等、宗教的ニーズに応える対応力

3. 教会のデジタル化とキリスト教界のDX化

(1) 教会におけるデジタル化、IT化

- ・礼拝のハイブリット化(オンライン礼拝、ライブ礼拝用ツール)の整備 :
YouTube、Zoom、Facebook、Line Live
- ・祈禱会、交わり、教会教育、委員会や会議等のオンライン化: Zoom
- ・教会HPの整備及び「ネット会員」「Web会員」の登録機能の追加

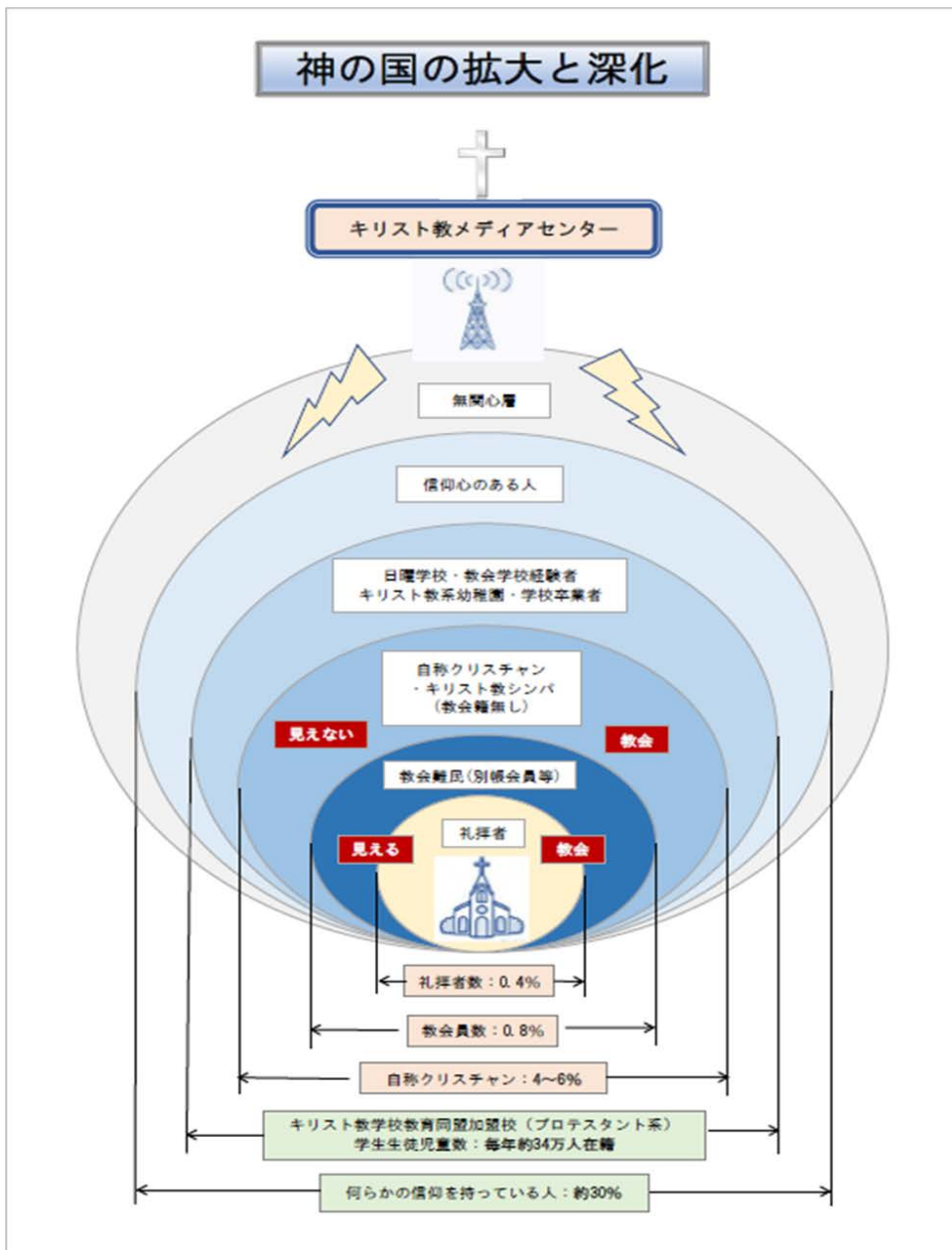
(2) 「キリスト教メディアセンター」の設立

「新常態(New Normal)」においては、会堂での集会やイベント中心の宣教に代わって、様々なメディアを用いた宣教が、今まで以上に重要な方策になると考えられる。

日本基督教団においても、教団として「情報発信のメディア・センター・スタジオ」の開発と有効利用の方策の検討を進めることが表明されている(2020年8月、秋山教団総幹事)ことから、日本のキリスト教界全体が取り組むべき課題ではないかと思われる。

必要なコンテンツとしては、①未信者・求道者向け:伝道メッセージ、今の時代が必要とするテーマ、②子供・中高生向け、③信徒向け:聖書・教理の学び、弟子化訓練、ライフサイクル対応(結婚・夫婦、クリスチャンホームの建設、子育て等)、④地域別、教団別の教会紹介(教会MAP)、⑤無牧教会向け礼拝配信、⑥マッチングサイト(婚活)等の情報発信が可能な「キリスト教メディアセンター」の設立が必要ではないかと思われる。

*現在PBAによる「聖書チャンネルBRIDGE」があるが、それをさらに拡充したもの



「新型コロナウイルスとの共存の時代」

論 2020年9月15日

天理大おやさと研究所教授 金子昭氏

(かねこ・あきら氏=1961年生まれ。慶応義塾大学院博士課程修了。博士(哲学)。専門は宗教倫理学、宗教人間論研究。著書に『驚異の仏教ボランティア—台湾の社会参画仏教「慈濟会」』など。)

突如として、時代はウイズコロナの時代に入った。人類は否応なく新型コロナウイルスとの共存という苦しい膠着戦を強いられている。宗教界も例外ではない。これまで良しとされてきた活動を自粛せざるを得なくなった。その痛手は大きい。一つの場所に大勢が集まって法要や礼拝を営むことは、現状では不可能である。集会やイベントなら中止や縮小開催、オンライン開催もやむを得ないが、大切な宗教行事をそのように行うことは、どの宗教にとっても苦渋の決断だ。

こうした状況は今後もずっと続くことが予想される。メガチャーチ的な大規模礼拝や集会を良しとする発想自体、もしかしたら放棄せざるを得なくなるかもしれない。だとすれば、これからは諸宗教がこの時代環境に適応しつつ、新たな活動のあり方、組織運営のあり方をどう再編していくことかが問われてこよう。ウイズコロナの時代における宗教界のレジリエンス(復活力)が求められる。

ここでは、(1)檀信徒への臨床対応、(2)宗門内外に向けた情報発信、(3)人々のための救済実践の3点でこの問題を考えてみたい。

心と心の繋がりを (1)檀信徒への臨床対応

現在、どの宗教もオンラインに活路を見いだそうとしているが、なかなか困難な道のりである。そもそも、法要や礼拝では、しめやかな雰囲気にはたり、五感全体で神仏の臨在を体感することが大きな要素を占めるからだ。在宅してモニター画面を見るだけならば、テレビ映画を眺めているのと変わりがない。たとえ今後バーチャルリアリティ技術により臨場感を高めても、それはやはり臨場「感」であり、実際の儀礼の場に身をもって臨んでいるわけではない。モニター越しでの宗教行事への参加の物足りなさ、隔靴搔痒なところはどうしても残っていくだろう。

しかし、これは良いチャンスでもある。これまで、高齢や病気のために寺院や教会に通えない檀家や信者のために、電話や手紙で交流を行う試みが行われてきた。たとえ互いの姿は見えなくても、声を通じて息遣いが伝わり、自筆の文章を通じて心遣いが伝わる。浄土真宗本願寺派善正寺の石川欣也前住職は、留守番電話に短い法話を吹き込んで、かけてきた人に聴聞してもらうという活動を続けてきた。この「法話のダイヤル」は石川前住職がご高齢のために現在は行われていないが、実に30年間続いたのだった。

寺院(ホーム)での活動がそのまま檀信徒の自宅(ホーム)へと直接つながる。この発想は、ネット配信によるオンライン法話の先駆けになるものだ。ある意味、リアルな動画を伴わず、電話の音声だけ、自筆の文字だけというアナログ方式のほうが、より信心を深めていくことができるとも言える。というのも、これを受ける檀信徒の側が全くの受け身にならず、自ら想像力で足りない部分を補うからである。電話や手紙、インターネット、これらはあくまでツールにすぎない。大切なことは、これらのツールをいかに有効活用して、檀信徒との心と心の繋がりを持つかということなのである。

天の戒めどう説くか (2)宗門内外に向けた情報発信

この度のコロナ禍を教えの上でどう受け止め、これにどう対応すべきか。数多くの教団・宗門ではそれぞれのホームページ等で情報発信を行っている。これら宗教界の対応を網羅的に概観したのは、宗教情報センターの藤山みどり氏である(5月17日、同センター配信記事)。藤山氏は、宗教界の一連の情報発信を評価しつつも、発せられたメッセージは一読しただけでは分かりづらいと、辛口のコментарを行っている。

私も伝統宗教・新宗教による情報の多くを読んでみたが、公式ホームページ上の発信でもあるせいか、命の有難さか思いやり・繋がりの大切さなど、焦点が絞りきれない一般的な表現のものが少なくなかった。藤山氏が分かりづらさと言われたのも、このことを指すのかもしれない。

一つ興味深いのは、教えの上からのコロナ禍の受け止め方である。どんな天災や疫病でも人災の側面を持っている。コロナ禍も同様である。一昔前では地域的な感染症で終わっていたものが、人々の広範な移動により世界的なパンデミックになってしまった。また、過度の都市化や自然環境破壊の問題も指摘できるだろう。そこから、コロナ禍は天（神仏）からの戒めであるとする“天譴論”が出てくる。天譴論は実を言うと、神仏の怒りや罰の現れだとするものから、人類に対する警告や試練、また自省、導きの教育とするものまで、グラデーションをなしている。どの宗教の教えの中にも天譴論的要素があり、その濃淡の段階をどうわきまえ、どう人々の心に届くように説いていくか、指導的立場にある者の力量が問われてこよう。それにはまだもう少し時間がかかるかもしれない。

疫災は有史以来たびたび日本を襲った。とすれば、日本古来の叡智がコロナ禍の受け止め方にとって参考になることがあるはずだ。今年創建 930 年になる土生神社（大阪府岸和田市）の阪井健二宮司は、感染症を疫病神として恐れ、隙を見せず通り過ぎるのを待つことと共に、氏神が地域の人々を守ってくれることを説き、「疫病退散祈願」のチラシを氏子家庭の一軒一軒にポスティングしてきた。昨今、自粛生活が喧伝されているが、阪井宮司の取り組みは、まさに古来の叡智に学び、地域の神社としてできる地域密着型の活動の一例だと言えよう。

新たな布教が可能に (3) 世の人々のための救済実践

宗教の社会活動についての議論では、よくホームとアウェーということが言われる。従来であれば、宗教者にとってホームとはすなわち宗教施設（寺院・教会）であり、アウェーとはそこから出て社会で活動することだ。しかし、先述したように、オンラインでの活動が定着すれば、宗教施設（ホーム）での活動はよりいっそう檀家・信徒の家（ホーム）に連結していく。災害支援や福祉活動の現場はどこまでもアウェーにあるが、心のケアのようなことはオンライン上でも可能なるがゆえに、これも今後はホームでの活動に組み込まれることが予想される。対面が原則だった医療の分野においても、近年ではオンライン診療が普及しつつあり、コロナ禍ではまさに急務のように言われている。宗教界でも、インターネットはツールとして大きな活用可能性を持っている。

インターネットの強みは個と個を繋げられるところにある。核家族の時代にあっては、子供が独立し配偶者がなくなれば独居状態になり、やがて本人の死と共にその家は消滅する。従来の寺院や教会は家単位で人々を繋ぎとめてきた。今後はこれに加えて個の単位での繋がりを図っていくことが期待できる。既存の檀信徒への対応だけでなく、新たな布教伝道もオンラインで開拓可能である。オンラインはこうしてアウェーを限りなくホームに近づけてくれる。無縁社会は終わっていないのだ。

なお、社会的な活動に関して付言すれば、予防啓発活動も必須である。現在、官民あげてコロナ時代における「新しい生活様式」を喧伝している。宗教界も少欲知足や慎みの大切さを説いているが、一歩進んでもっと具体的な生活様式の提案を打ち出せないだろうか。例えば、台湾に本部を持つ NGO 仏教慈濟基金会では、代表の證嚴法師が、新型コロナウイルスが動物由来のものであることを強調し、家畜を屠殺して食べるべきではないと、この機会を捉えて一般の人々にも菜食の勧めを打ち出した。これなどを参考にして、日本の諸宗教もまた、宗教ならではの積極的な提言を行うことが期待される。

「コロナ禍の 1 年 心を鎮める教えに心向ける」

社説 2020 年 12 月 18 日

新型コロナ感染者の累計は 4 月 2 日には世界で 100 万人を超えた。1 千万人を超えたのは 6 月 28 日。12 月上旬には 7 千万人に近づき、死者も 150 万人を超えた。生活のあらゆる面に影響が及び、人と人の触れ合いが重要な宗教的営みの多くが分断された。

国内では定期的な宗教行事の自粛が相次ぎ、何十年あるいは何百年と続いた神社や仏教宗派の記念行事も軒並み中止や延期の事態となった。今年は『日本書紀』編纂 1300 年の節目だったが、國學院大で予定していた企画は延期となった。明治神宮は創建 100 年の年だったが、祭典は行ったものの賑々しい行事は取りやめた。他方、コロナ退散の祈願や祈祷も行われ、突如話題となったアマビエを描いたお守りも登場した。

キリスト教やイスラム教では教会やモスクで定期的に礼拝を行うが、それも様変わりした。3 月下旬には、イタリアのカトリック教会が会衆席に信者の写真を並べてミサを行ったニュースが流れた。

イスラム教でも 3 月頃から金曜日の集団礼拝を控える国が増えた。イスラム暦の第 12 月に行われる巡礼(ハッジ)は、今年は 7 月下旬に始まった。サウジアラビア政府は 6 月下旬に国外からの巡礼者の受け入れを中止すると発表した。ごく小規模の行事になった。

信仰実践とコロナ対策がぶつかり合う局面は、日本ではほとんど見受けられなかったが、韓国では 2 月に新天地イエス教会が集団での礼拝を強行し、感染を拡大させたとして批判を浴びた。8 月にはサラン第一教会の牧師が疫学調査の妨害などで告発された。米国ではニューヨーク州のクオモ知事がコロナ感染者の大規模発生地域に対する一部礼拝所の人数制限などを 10 月に定めた。ユダヤ教組織とカトリック教会がこれに反発し訴訟となった。

コロナ問題とは直接関係はしないが、宗教間の分断や対立のニュースも少なくなかった。国内では香川県の金刀比羅宮が 10 月に神社本庁を離脱した。本庁への不信感が募ったなどの理由である。トルコ・イスタンブールの世界遺産アヤソフィアが博物館からモスクになり、7 月に 86 年ぶりに金曜礼拝が行われた。ローマ教皇は悲しみの意を示した。フランスのシャルリー・エブド紙が 9 月にムハンマド風刺画を再掲し、これに関連して 10 月にはフランス人教師が殺害される事件が起こった。

世界中の人々が強いストレスにさらされ、感情の爆発が起こりやすくなっている可能性もある。こういうときこそ、心を鎮める宗教の教えを顧みたい。

教団・教派、宣教団体の機関紙・ニュースから

カトリック中央協議会 会報 (2020 年 9・10 月号 580 号)

2020 年「世界宣教の日」教皇メッセージ

「わたしがここにおります。わたしを遣わしてください」(イザヤ 6・8)

親愛なる兄弟姉妹の皆さん

昨年 10 月、教会全体が「福音宣教のための特別月間」に熱意をもって取り組んだことを神に感謝したいと思います。わたしはこの特別月間が、「洗礼を受け、派遣される——世界で宣教するキリストの教会」をテーマとする歩みを通して、多くの共同体で、宣教のための回心を促すことに貢献したと確信しています。

COVID-19(新型コロナウイルス感染症)のパンデミックがもたらす苦しみやさまざまな課題が著しい今年、教会全体は、預言者イザヤの召命物語にある次のことばに照らされながら、この宣教の歩みを続けています。「わたしがここにおります。わたしを遣わしてください」(イザヤ 6・8)。このことばは、「だれを遣わすべきか」(同)という主の問いかけに対する、つねに新たにされるこたえです。神のみ心から、神のいつくしみから出るこの呼びかけは、今日の世界的な危機のただ中で、教会と人類に向けられています。「福音の中の弟子たちのように、思いもよらない激しい突風に不意を突かれたのです。わたしたちは自分たちが同じ舟に乗っていることに気づきました。皆弱く、先が見えずにいても、だれもが大切に必要存在なのだ。皆でともに舟を漕ぐよう求められていて、だれもが互いに慰め合わなければならないのだ。この舟の上に……わたしたち皆がいます。不安の中で声をそろえて『おぼれて』(マルコ 4・38)しまうと叫ぶあの弟子たちのように、わたしたちも自力で進むことはできず、ともに力を出すことで初めて前進できるのだと知ったのです」(「特別な祈りの式におけるウルビ・エト・オルビのメッセージ」2020 年 3 月 27 日)。わたしたちは心底おびえ、途方に暮れ、不安にさいなまれています。痛みと死により、人間のもろさを痛感していますが、それと同時に、だれもが生きたい、悪から解放されたいという強い思いを抱いていることに気づかされます。こうした状況においては、宣教への呼びかけと、神と隣人への愛のために自分の殻から出るようにとの招きは、分かち合い、奉仕し、執り成す機会として示されます。神から各自に託された使命は、おびえて閉じこもる者から、自分を差し出すことによって自分を取り戻し、新たにされる者へとわたしたちを変えるのです。

神は、イエスの使命が成し遂げられた十字架でのいけにえ(ヨハネ 19・28-30 参照)において、ご自身の愛が一人ひとりに、そして皆に向けられていることを明らかにされます(ヨハネ 19・26-27 参照)。そして、

遣わされる覚悟ができてきているかと、わたしたちにお尋ねになります。なぜなら、神は愛であり、使命への絶え間ない働きの中で、いのちを与えるためにご自分の外につねに出て行かれるかただからです。父なる神は、人間への愛ゆえに、御子イエスをお遣わしになりました(ヨハネ 3・16 参照)。イエスは御父から遣わされたかたです。イエスの人となりとそのわざは、御父のみ旨に完全に従うものです(ヨハネ 4・34、6・38、8・12-30、ヘブライ 10・5-10 参照)。そして、わたしたちのために十字架につけられて復活されたイエスが、同じようにわたしたちをご自身の愛の躍動へと引き寄せ、教会を生き生きとさせるご自身の霊によって、わたしたちをキリストの弟子とし、使命のためにこの世界と諸国民へ派遣しておられるのです。

「使命(ミッション)、『教会が外向いて行くこと』とは、ある種の計画でも、意思の力だけでなし遂げる意向でもありません。教会を外に出向かせておられるのはキリストに他なりません。福音を告げ知らせる という使命を果たそうとするのは、聖霊があなたを突き動かし、あなたを導いておられるからです」(教皇フランシスコ『このかたなしには何もできない—現代世界で宣教者であること』16-17 [Senza di Lui non possiamo far nulla: Essere missionari oggi nel mondo, Libreria Editrice Vaticana-San Paolo, 2019])。神はいつも、まず先にわたしたちを愛してください、その愛をもってわたしたちに会い、わたしたちを呼んでおられるのです。一人ひとりの召命は、教会においてわたしたちが神の息子、娘であり、神の家族であること、イエスが示した神の愛において兄弟姉妹である、という事実から生まれます。ただし、だれもが人間としての尊厳をもって。その尊厳は、神の子になりなさい、洗礼の秘跡と自由意志による信仰によってみ心につねにかなう者になりなさいという神の呼びかけに根ざしています。

すでに無償でいのちを受けたということが、一粒の種として自分自身を差し出すという力強い動きに加わるよう招かれていることを示唆しています。洗礼を受けた人のうちでその種は、結婚生活や神の国のために独身で生きることの中で、愛の応答として実ります。人間のいのちは神の愛から生まれ、愛のうちに成長し、愛に向かいます。だれも神の愛から排除されることはありません。そして神は、十字架上の御子イエスの聖なるいけにえのうちに、罪と死に勝利されました(ローマ 8・31-39 参照)。神にとって悪は—罪でさえも—、愛するため、さらに深く愛するための機会となります(マタイ 5・38-48、ルカ 23・33-34 参照)。ですから、神のいつくしみは、過越の神秘を通して、人類の原初の傷をいやし、宇宙全体へと注がれているのです。この世界のための神の愛の普遍的秘跡である教会は、イエスの使命を歴史の中で引き継ぎ、あらゆるところへわたしたちを派遣します。それは、わたしたちによる信仰のあかしと福音の告知を通して、神がご自分の愛をはっきりとお示しになり、いつどこでも、人々の心に、思いに、からだに、社会に、文化に触れて、それらを変えられるようにするためです。

宣教は、神の呼びかけへの自由で自覚的な応答です。しかし、その呼びかけは、教会のうちに現存されるイエスとの個人的な愛の結びつきを生きているときにのみ気づけるものです。次のように自らに問いましょう。聖霊を自分の人生に迎え入れる心構えができていだろうか。結婚生活を送るにせよ、独身での奉獻生活や叙階による司祭職を生きるにせよ、日常生活の中で、宣教への呼びかけに耳を傾ける備えができていだろうか。いつくしみ深い父なる神への信仰をあかしするために、イエス・キリストの救いの福音を告げ知らせるために、教会を築くことによって聖霊の聖なるいのちを分かち合うために、どこへでも派遣される覚悟ができていだろうか。イエスの母マリアのように、何のためらいもなく、み旨に仕える備えができていだろうか(ルカ 1・38 参照)。こうした心構えは、「わたしがここにおります。わたしを遣わしてください」(イザヤ 6・8)と神にこたえるために欠かせないものです。しかも、それは抽象的なことではなく、教会と歴史の今この瞬間にあることなのです。

このパンデミックのときに神が何を語っておられるかを理解することもまた、教会の宣教に課せられた挑戦です。病、苦しみ、恐れ、孤立が、わたしたちに挑んでいます。看取られずに亡くなった人、独りで置き去りにされた人、仕事も収入も失った人、家や食べ物のない人、そうした人々の窮状がわたしたちを問いただします。ソーシャルディスタンスや在宅が要請される中で、わたしたちは社会的なかかわりだけでなく、共同体としての神とのかかわりも必要としていることを再認識するよう招かれています。こうした事態によって促されるのは、不信感や無関心を増幅することなどではなく、他者とのかかわり方にこれまで以上に心を配ることであるべきです。また、祈り—その中で神はわたしたちの心に触れ、働きかけておられます—を通して、わたしたちの心は、兄弟姉妹が求める愛と尊厳と自由へ、すべての被造物の保護へと開かれます。感謝の祭儀を祝うために教会として集うことができなくなったことで、わたしたちは、主日ごとにミサを行えない多くのキリスト教共同体の境遇に触れることができました。こうした状況の中で、神は再びわたしたちに問いかけておられます。

「だれを遣わすべきか」。そして、物惜しみしない確信に満ちたこたえを待っておられます。「わたしがここにあります。わたしを遣わしてください」（イザヤ 6・8）。神は、ご自分の愛と、罪と死からの救いと、悪からの解放をあかしするために、世界と諸国民のもとに遣わす人を探し続けておられます（マタイ 9・35-38、ルカ 10・1-12 参照）。

「世界宣教の日」を記念することは、いかに皆さんの祈り、黙想、物的支援が、教会におけるイエスの使命に積極的にあずかる機会となっているかを、再確認することでもあります。10月の第三主日の典礼祭儀での献金として行われる愛のわざは、教皇庁宣教事業がわたしの名で行う宣教活動を支えています。それは、すべての人を救うために、世界中の人々と教会の霊的・物的なニーズにこたえるための活動に使われます。

福音宣教の星、悲しむ人の慰め、御子イエスの宣教する弟子である至聖なるおとめマリアが、わたしたちのために執り成し、わたしたちを支え続けてくださいますように。

ローマ
サン・ジョヴァンニ・イン・ラテラノ大聖堂にて
2020年5月31日
聖霊降臨の主日
フランシスコ

カトリック中央協議会 諸文書 (2020/11/22)

「諸宗教の連帯による傷ついた世界への奉仕——コロナ危機とその後における省察と行動を求めるキリスト教の呼びかけ」邦訳版公開にあたって

新型コロナウイルス感染症は、昨年末の発生以来1年を迎えようとしている今もその拡大はとどまるところを知らず、感染者と死亡者の数は増え続けています。ワクチン開発が進んでいるというニュースがある一方で、世界の皆にそれがいつ届くのかは皆目分からず、出口の見えない不安が満ちています。一方でポストコロナへの展望や提言も聞かれるようになり、パンデミックの危機を乗り越えた後の世界へと視点が変わりつつあります。

しかしながら、未だウイズコロナの真ただ中にいる私たちにとっては、まず注視すべきは危機におびやかされている弱い立場の人たちであり、大切なのは来年何をするかではなく、今日何ができるのかを考えることでしょう。

世界教会協議会(WCC)と教皇庁諸宗教対話評議会(PCID)による共同文書であるこの呼びかけは、次のような目的のためです。

イエスは、仕えられるためではなく仕えるために来られました(マタイ 20:28)。善いサマリア人の愛と寛大さに倣って、弱い人、弱い立場に置かれた人を支え、苦しむ人を慰め、痛みと苦しみを和らげ、すべての人の尊厳を確保するよう努めましょう。心を広げて対話し、手を広げて連帯し、癒しと希望に満ちた世界をともに築くことができますように。(17頁「結論」より)

21世紀最初の世界的な危機を乗り越え、亀裂と分断を生み出す排他主義に対抗していくためには、教派や宗教の壁を越えて、神を信じる人たち皆による連帯こそが必要だということを、この呼びかけは力強く語っています。

この呼びかけが、教会で、個人で、グループで読まれ、提案に挙げられている具体的な行動を実践するきっかけになることを願ってやみません。「恐れるな。わたしは民全体に与えられる大きな喜びを告げる。今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった」(ルカ 2:10-11a)。クリスマスをも1カ月後に迎えるすべての人たちの上に、希望の光が輝くように働きましょう。

2020年11月22日
日本カトリック司教協議会 諸宗教部門
責任司教 パウロ酒井 俊弘
担当司教 ペトロ中村 倫明

「二つのプロジェクト」

新型コロナウイルスによる異常事態が始まって半年を過ぎ、収束の気配は見えず、むしろ拡大に向かっていくような状況が続いています。これによってこれまで造りあげてきた社会の構造全体が根本から揺るがされています。教会も例外ではなく、礼拝や集会の持ち方をはじめ牧会のありかたをめぐって、各教会の格闘が続いています。教団事務局も職員の在宅勤務の体制を増やしたり、各委員会の会議のほとんどをオンライン会議にして3密を避けたりと、これまでの日常業務は大幅に変更されています。これは歴史的な出来事で、世界のあり方がこの出来事以前と以後とでは変わってくる、いわゆるパラダイム・シフトが起こるに違いないと思います。

このときに当たって二つのプロジェクトを考えています。わたしが加わっている NCC の神学と宣教委員会では、この出来事を神学的な課題として、また、宣教の課題として捉えるための教派を超えた交流の場を設ける計画です。今日の教会は神と世界の隣人から何を聞き取り、何を考え、何を伝えたか、様々な角度からの交流プラットフォームの形成です。

もう一つは、教団として情報発信のメディア・センター・スタジオをもうけ、各教会だけでなく教団のレベルでもその領域の開発と有効利用の方策を進めたいと願っています。

（教団総幹事 秋山 徹）

第41総会期第9回常議員会

第41総会期第9回常議員会が10月26日に常議員28名が出席して行われた。三役、総幹事、幹事、一部の常議員が事務局に集い、多くの議員はオンラインで出席した。

総幹事報告において、秋山徹総幹事は、冒頭、各教区が努力しつつ教団総会議員の選出を行ったことに対する感謝を述べた。また、コロナ禍への対応について触れ、「2021年度版教団年鑑」を休刊としたものの「便覧」の発行を予定していること、41総会期の諸報告は、1期2年間の活動報告を行い、延期された1年間は「補遺」を考えていることなどを報告した。教団三局については、退職者が出た後、職員の採用は行わず暫くは自然減を続けること、コロナ禍の財政状況に鑑み、幹事の夏期一時金を減額したことなどを報告した。

青年伝道については、「教団メディア戦略」について、ユーチューブなどで発信するスタジオ構想を検討していることなどを報告した。

質疑応答の中で、会議における書面決議の有効性について質問があり、秋山総幹事は、「幹事のレベルでは協議しているが、正式なルートに乗せて協議はしていない。既に終わった会議については、有効なものとして進んでいる」と述べた。

教師養成制度検討委員会の報告では、菅原力委員長が、教団の教師論を明らかにした3頁にわたる文章「日本基督教団の教師論」を報告した。芳賀力東京神学大学学長は、「記されているのは最も基本的なこと。神学校と教団が共通の土台に立てるように、更に展開してほしい」と意見を述べた。また、「二種教職制、沖縄教区のことはどう反映したのか」、「合同教会の教師論として相応しいのか」、「信徒についても言えることであり、具体的な職能を記すべき」等、様々な質問、意見が出された。菅原委員長は、「教師をめぐる諸問題を反映するものではなく、信仰告白・教憲が記す一番大事な部分を共有するためのもの」と述べた。

石橋秀雄議長は、教団として丁寧に扱い決議することが重要との判断から、「今回は報告承認とし、2月の常議員会に三役から議案として出した上で諮る」と述べた。

教団伝道対策検討委員会報告においては、岸俊彦伝道推進基本方針展開検討小委員長が全国伝道推進献金の報告と、一巡した『信徒の友』への掲載を、費用負担を減らした形で継続することを報告した。

久世そらち機構改定検討小委員長が、来年の総会までに機構改定の理解を深めるために『教団機構改定に関する検討資料』についての「Q&A」を作成すること、作成したものをホームページに公開し、順次内容を追加して行くこと等を報告した。

第42回教団総会に関することとして、教団総会準備委員会から、2021年10月26～28日、池袋・ホテルメトロポリタンで、ホテルが実施する6割の人数制限に従い、2会場をリモートでつなぐ形で実施することが提案された。「ホテルを使用せず、各地域をオンラインでつないで開催しては」との意見も出されたが、提案の通りに可決した。（新報編集部報）

日本聖公会管区事務所だより 第359号（2020年11月25日）

「主に在る兄弟姉妹の皆さまへ」

首座主教 ルカ 武藤 謙一

主の御名を賛美いたします。

植松誠主教様は2006年から14年にわたって日本聖公会首座主教として働いてこられました。日本聖公会のためだけではなく、アングリカンコミュニオンにおいても、また他教派、多宗派との協働においても大きな貢献をされてこられました。これまでの首座主教としての尊いお働きに心から感謝いたします。本当に お疲れ様でした。

10月27日～29日に開催された日本聖公会第65(定期)総会で、植松誠主教に代わってわたしが首座主教に選出されました。選出された時には不安と畏れで胸が苦しくなり逃げ出したいような気持でしたが、神様から与えられた務めであると信じて歩いていこうと思っています。小さな欠けた土の器であることは主がご存知です。ニアサリオンで売られる五羽の雀、「その一羽さえ、神がお忘れになるようなことはない」(ルカ12:6)のみ言葉に信頼し、主ご自身が必要なお導きと助けを与えてくださると信じます。

しかし、この務めはわたし一人では担いきれないものであり、主教団をはじめ、皆さまのお祈りとご協力をお願いいたします。植松主教様が首座主教に選出される度に「首座主教のためにお祈りください」と繰り返し挨拶されていましたが、今、わたしはそのお気持ちがよく分かります。どうぞ今まで以上に首座主教のためにお祈りくださるようお願いいたします。今総会で、わたしたちは「宣教協働区と伝道教区制」という今までの聖公会の在り方を大きく変える議案を決議しました。「将来的には11ある教区を再編してその数を少なくするというものですが、その前に、まずは日本聖公会を三つの宣教協働区に分けて、そこに立てられる協働委員会が、自分の教区だけではない新たな宣教協働区の運営・宣教・牧会について積極的に取り組むということ、また、教区によっては主教を持たない『伝道教区』になっていくということ、そして教区の再編を促進するというのがこの議案の趣旨です。」(総会議長挨拶より)

これからのことについては、主教会から「主教会メッセージ-宣教協働区と伝道教区制について-」を出しましたのでお読みください。各宣教協働区には協働委員会が設置されます。共に歩むことで互いの交わりが深められ、礼拝、宣教・牧会がより豊かなものとなることを願っています。どうぞ「主教会メッセージ」をよくお読みくださり、各教区、教会で信徒の皆さんに丁寧な説明がなされ理解が深まるようお願いいたします。また2022年11月に宣教協議会を開催することが決まりました。2012年に開催された宣教協議会の提言に基づくものですが、単にこの10年間の実りを分かち合うだけでなく、宣教協働区、協働委員会の果たす役割や、現代の日本社会の多様な課題を踏まえ、これからの日本聖公会の宣教課題を整理し、わたしたちの歩みを協議する大切な機会となることでしょう。このこともお覚えくださるようお願いいたします。新型コロナウイルス感染者が急増しています。このような時だからこそ、誰も孤立することのないように、それぞれの場で宣教の業に励んでまいりましょう。



「新約教会に見習って家の教会を」

宣教研究部長 趙 南洙

「そして、毎日心を一にして宮に集まり、家々でパンを裂き、喜びと真心をもって食事をともにし、神を賛美し、民全体から好意を持たれていた。主は毎日、救われる人々を加えて一つにしてください」

(使徒 2 章 46~47 節)

主のからだである教会を建てあげる教会形成の見本は、新約聖書に出てくる教会ではないかと思えます。教団教派によって若干の違いはあるとしても、目指すべき教会形成の見本は、それぞれの教派の伝統教会ではなく、新約教会です。地域(ローカル)の会堂教会にも集まり、それぞれ信徒の家でも集まって、教会の存在目的である、たましいの救いと弟子づくりのために、礼拝と交わり、伝道と教育などが執り行われるべきです。また、家で集まる家の教会が教会として持続するためにも、守るべき新約聖書的教えをしっかり覚えることもとても大切です。

新約聖書によるとすべてが家の教会であり、彼らは会堂教会と同じように休まず、毎週家で集まるのを原則にしていました。物理的な障害などにより、集まらない場合もあり得ますが、家の教会こそ教会であるので毎週集まるべきです。たとえ、一緒に集っていたメンバーが来ない状況が起こっても休まず、家で集まるのが大切です。それもレストランやコーヒーショップではなく、日々の生き方を分かち合える信徒の家で集まるのが大切です。

家の教会には、真心による愛餐の大切さがありました。大切な食事を一緒にしないなら家族になれないので、彼らを家の教会と言えません。真心をもって食事を共にするのは互いに仕え合う愛の実践です。そのため、よく生かされている家の教会には必ず、持ち寄りの手作り料理による豊かな愛餐(アガペー)があります。やむを得ず出前による愛餐もあるかもしれないけれども、真心をもって食事を共にするなら、手作りにもおとらないと思えます。

家の教会には未信者(VIP)も共に集いました。迫害の時代にもかかわらず、多くの未信者が家の教会に招かれていました。それはたましいの救いが教会の存在目的であったからでした。未信者が来ない教会は、現状維持も無理です。新しいたましいが起こされない教会は、マンネリズムにはまり、霊的勢いまで消えてしまいます。だからこそ、教会はすでに信じる信徒への関心より未信者への配慮を増やすべきです。このような考えは、律法主義的な形式ではなく、新約聖書の理念を守り、教会の存在目的を取り戻すための実践信仰の証であると言えます。(招待キリスト教会牧師)

施政方針 次世代育成プロジェクト

次世代育成主事 安井 巖

次世代育成プロジェクトが本格始動して4年目を迎え、子どもから子育て世代のクリスチャンホームまでをターゲットとし、それぞれの世代に向けての働きを直接的に行う予定にありました。しかし、新型コロナウイルス感染拡大のため、予定していた活動がすべて中止となってしまいました。

そのような状況のなか、次世代のメンバーは、オンラインや動画配信を通して臨機応変にやり方を変え、新たな取り組みを始めました。それによって、全国の教会との繋がりが一気に広がり、主の憐れみに感謝するばかりであります。

① 子どもミニストリー

「自宅CSサポート」として、賛美やメッセージをYouTubeで配信して、教会学校の働きの支援を始めました。CSネットワーク委員会、CS教師研修会もオンラインを用いての開催となります。

② 青少年委員会

来年のユースジャムは、オンライン開催という初めての試みにチャレンジすることになりました。また、春・夏・秋のキャンプはすべて中止となりましたが、オンラインを用いての集会を6月から

始め、全国から多くの若者たちの参加が与えられています。今後も毎月オンライン集会を行いながら、横の繋がりを深めつつ、ユースジャムに向けて準備を進めて参ります。

③ MM お茶会

MM お茶会も実際に集まってすることができないなか、オンラインを用いての講演会などを行う予定です。

④ ファミリーミニストリー

新年度から新たに立ち上がった働きですが、こちらにもオンラインを用いての集いを 8 月に行い、多くの参加者が与えられ、様々な必要があることを知りました。今後も定期的にオンラインを通しての集まりを続け、子育て、夫婦関係など家族に関わる課題について、共に語り合い祈り合うときをもって参ります。また、YouTube を通して、子育て、夫婦関係について、メッセージ動画の配信も始めました。新型コロナウイルス感染症のため、一つのところに集まる活動ができないなか、しかし、できる手立てを用いて、次世代に向けての働きが継続できていることを心から感謝しています。これからも引き続き、一つひとつの働きが守られ、用いられますようお願いいたします。

日本ホーリネス教団「JHC Revival 865 号」(2020.11)

施政方針 東京聖書学院

「仕えるリーダーの育成のために」

東京聖書学院長 錦織 寛

東京聖書学院は神に仕え、教会に仕える働き人を育て、送り出していかなければならない。まさにサーバントリーダーが、ここで正しく理解され、造られていかなければ神に喜ばれる教団・教会の未来はないと本当に思う。

それでは、どのように仕えるリーダーは造られていくのだろうか。確かに主イエスの教えられた聖書的なリーダーシップについて、授業などを通して正しく伝えるということはとても大切である。主の喜ばれるリーダーの姿を言葉で理解し、説明できるということは、一人ひとりが教会に出て行ったときに必ず役に立つだろう。

様々な実践を通しての学びもある。集団生活や教会での実習などを通して、仕えることを学ぶ。そのような実践の場面では、自分がいかに仕えることができないかということに直面させられる。そして、砕かれて主の御前に近づくのである。「仕える」ということが、決して単なる理論上の事柄、絵空事にならないためにも、時には細かく注意されたり、自分の姿勢を振り返ったり、具体的に何をどのようにすべきかを手取り足取り教えられる必要もあるだろう。

ただ、一番は人との人格的な交わりによって学ぶということだ。言い換えれば、よい模範を見て学ぶということである。「あの人のようになりたい」という目標を与えられ、その人を見つめ、またその人格と交わることによって、その人に似せられていく。その意味では、修養生たちに、「従え」「仕えることを学べ」と四六時中怒鳴り続けるのではなく、教師たちがまず、しもべとしての自らを示していくことだ。

ただ「教師」というラベルを負うようになると、とかく仕えることが難しくなる。この世の「教師」に対するイメージは、やはり人に命令し、自分の考え・理念に従って人を指導し、従わせるというものが強い。弱みを見せたら指導ができなくなる、仕える姿をとったらすぐに生徒は付け上がって、ますます言うことを聞かなくなる——と誤解する。けれども、主イエスは神の子であるのに、とことん仕えてくださった。だからこそ、まず教師が、どこまでも仕えてくださった主イエスに倣うことがとても大切なのだ。

修養生たちが仕える者となるために、まず自らの在り方が問われている。これは覚悟や気合で何とかかなる問題ではない。私たちは、教師たちのために、そして修養生たちのために、神の恵みの御業を祈り求め、期待しているのだ。



イマヌエル綜合伝道団「イマヌエル教報 891 号」 (2020.10)

新型コロナウイルスの中で 「日曜日なのに 礼拝に行けない!」

神学委員会 国重 潔志

強制的に教会での礼拝をやめさせられたことはあっても、自主的に休止になったのは日本の教会史上初めてのことでしょう。今まで経験したことのない難しさに直面しているようにも思えます。けれども、です。

聖書を開きますと、神さまを礼拝する共同体から隔絶された環境に置かれた人物の一人に、パウロがあげられます。彼は回心後、使徒たちから離れ、アラビアでしばらく過ごしました。その期間、アラビアで伝道していたとも、あるいは、それまで学んできていた旧約聖書と主イエスの救いがどう調和するか静かに学んでいたとも言われます。いずれにせよ、パウロは使徒たちの礼拝共同体からしばらく距離を置いていました。その期間は、後の彼の活動のために重要であったと言われます。創世記でも、ヨセフは、神さまを礼拝する家族から引き離されたエジプトで将来に備えていました。ヨセフはその後、父とともに礼拝できない孤独な地に「神が私を---お遣わしになった」とまで言います。

つまり、福音の活動が充実したものとなっていった背後には、一人になったということもあり、神さまはそれを用いられることがあります。教会に出かけて、ともに神さまを礼拝することができないことからくる閉塞感を私たちは感じます。けれども、私たちが今感じているよりも数百倍も重たい閉塞感に直面していた牧師に葛田二雄先生がいました。そうした孤独な拘置所での日々が私たちの教団の出発点となったのは、皆さまもよくご存知のことかと思えます。

しばらく前に聖化大会の講師として来日されたカニンガム博士は、説教でジャガイモ畑のことを話しておられました。雹が降って、ジャガイモの葉や茎が無残にもボロボロになってしまったそうです。けれども、それによって地中のジャガイモが立派になるというのです。日に見える部分がボロボロになるからこそ、目に見えない部分が豊かになることもある、と。コロナ禍によって日曜日に教会で礼拝が聞かれていないという、目に見える部分はボロボロにさせられているかもしれません。けれども、それによって教会の、そして私たちそれぞれの目に見えないところが豊かになり、実り多い未来が聞かれ始めていることにも目にとめたいものです。

イマヌエル綜合伝道団「イマヌエル教報 892 号」 (2020.11)

JEA 宣教フォーラム開催

「開催の目的と意義 コロナ禍での教会」

国内教会局長 岩上 祝仁

日本福音同盟 (JEA) では毎年一回秋に宣教フォーラムを各地で開催してきました。宣教フォーラムには二つの使命があります。一つは 7 年毎に開催される日本伝道会議の間をつなぎ、JEA 主体で行われるプロジェクトの働きを確認しさらに進める役割です。具体的な宣教協力の実が毎年残されています。もう一つは日本各地で開催することで、各地の福音派教会の交わりと宣教協力の実現です。フォーラム開催のために地方の教会が協力することで交わりと協力体制を整えてゆきます。

今年は本来なら東京で会合を持つ予定でしたが、新型コロナウイルスのために集まることができませんでした。その代わりにインターネットでの宣教フォーラムが開催され、今まで難しかった全国からの参加者が与えられて、250 名を越えました。その中で、コロナ禍の中での教会のあり方を見直し、日本だけでなく世界大の宣教協力の大きな可能性を見たフォーラムでした。



JEA宣教フォーラムに参加して

「チャレンジの時かも でも配慮も忘れずに」

岐阜教会 大場 広子

9月29日(火)、30日(水)にZoomを用いて開催されましたJEA宣教フォーラムに参加させていただきました。2日間で3つの分科会に参加しましたが、そのうちの一つ(「旧約聖書における律法の柔軟な運用」「いっしょに集まる幸い」)を通して考えさせられたことについてお分かちします。

新型コロナウイルス感染拡大により、集会の持ち方の変更を余儀なくされた教会が多いことと思います。また、多くの教会で集会後の会食を休止していると聞いています。そのため、今まで当たり前のようにしていた交わり、みことばの分かち合い、祈り合う機会が激減しているのではないのでしょうか。私が遣わされている教会はそれに該当します。それでもなお、信徒の皆さんがお互いを気にかけることができるように、お互いのために祈り続けることができるように、そして、その関係が希薄にならないようにとお祈りをしていました。

そのような時に宣教フォーラムの分科会を通して「集まり方には多様性があること」「多様性があるのだから、一つの方法にこだわらなくても良いのでは---」という言葉に目が聞かれました。具体的には、現在主流になっているZoomを利用しての分かち合い、食事会、オンラインキャンプなどが取り挙げられました。すでにインマヌエルの中でも行なっている教会があると聞いています。今年は、とにキャンとYSもZoom開催されました。

コロナ禍が続く、デジタル化が進む中、教会に関係する子どもや青年たちは今まで以上にインターネットを活用することでしょう。しかしその一方で、教会にはご高齢の方々がおられます。また、年代を問わず、インターネットを得意となさらない方がいるかもしれません。ですから、対象者によって対応が変わります。配慮が必要です。しかし、御霊の導きを確認したのなら、自分の思いや考えなどに固執せず、新しいことにチャレンジしたいものです。御霊の導きに従うとき、新たな形で主を中心とした交流が生まれるのだと思います。そして、そこに新しい恵みが備えられていると信じます。

「二人か三人がわたしの名において集まっているところには、わたしもその中にいるのです。」

(マタイ18章20節)

JEA宣教フォーラムに参加して

「神からの強制リセットなのか 支え合う新しい文化を」

豊田教畠会 高山 清和

9月29日~30日の2日間にわたりZoomで行われたJEA宣教フォーラムに参加しました。2日目午前の「コロナウイルス禍での教会---宣教の課題と可能性---」の講演から感じたことをお分かちします。主観的な感想であることをお許しください。

講演を通して受けた印象は、主にある励ましと希望です。冒頭、講師の中西雅裕先生はコロナ禍を「神からの強制リセット」と位置付けて語られました。神がリセットされたのなら、神が次の扉を開かれるはずで、そこに大きな励ましと希望を得たのです。

その具体的なものが、インターネットを活用した礼拝・交わり・宣教です。ネット世界に対する危険性や懸念があることは承知の上で、これを活用することで、今まで福音に触れることがなかった方々に福音を届ける可能性が出てきました。これまで教会が大切にしてきた人と人が交わる文化とオンラインによる新しいチャンネルを融合させた先に将来の教会の姿があるような気がいたします。

一方で社会が大きく変わろうとしている中で、弱さを抱える方々にどのように寄り添い、支えていくのかという信仰者の在り方が問われていると感じました。講演の中で、従来の教会は強い人のものであったと語られ、健康で時間があり人と交わることが苦でない人が集まる場が教会であったということです。コロナ禍は弱い人の存在を浮き彫りにし、そのような方々に信仰者は愛をもって関わることを求められていると語られ、とても共感しました。立ち止まってキリストの愛の表し方を考える良い機会にしたいです。

また、集まることや交わりの制限が長期化するとき一番心配なのは孤立です。じわじわと疲れやストレスが溜まります。これをリモートで補うことには限界もありますから、教派教団を超えて地域内の教会で支え合うことがますます大切になってくると感じました。

未知の世界に踏み込んだばかりですから、できるところから取り組み、経験を積み重ね、得られた情報を共有して福音のために牧師も信徒も共労したく願われました。教会は社会に出ていくようにと言われて久しいですが、そうせざるを得ない状況が来たのだと思います。「散らされた人たちは、みことばの福音を伝えながら巡り歩いた」(使徒の働き 8 章 4 節)。With コロナに主の御業を!

日本アッセンブリーズ・オブ・ゴット教団「アッセンブリー News NO.782」(2020.11)

この難局を乗り越えよう!

——新型コロナウイルスのために共に祈り、共に闘う⑧——

「今が新しい革袋を用意するとき」

中央聖書神学校長
めぐみ福音キリスト教会(東京都)
三宅 規之

新型コロナウイルスの感染拡大は、私たちの生活、仕事、学校生活のみならず、教会にもさまざまな変化を起こしています。今までの本欄において、これまで分かち合われた諸教会の取り組み(例えばZOOMを用いたのユース礼拝、オンラインセルヤ、YouTube による日曜学校の動画配信など)を拝読しても、このことを強く感じます。そして多くの人が、これらの変化は何らかの形でウイルス騒動が収束したあとも続くであろうと予想しています。

私たちはこの変化をどのように理解すべきでしょうか。はっきり言えることは、私たちの信じる神が、この世界で起こるすべてのことに、主権をもっておられるということです。ですから、主ご自身が、何か新しいことをこの世界に始めようとされていると、受け止めることもできると思います。

私がこの春から強く示されている御言葉は「また、人は新しいぶどう酒を古い皮袋に入れるようなことはしません。そんなことをすれば、皮袋は裂けて、ぶどう酒が流れ出てしまい、皮袋もだめになってしまいます。新しいぶどう酒を新しい皮袋に入れれば、両方とも保ちます」(マタイ 9:17)です。

このイエス様の言葉は、バプテスマのヨハネの弟子たちが、「私たちとパリサイ人は断食するのに、なぜ、あなたの弟子たちは断食しないのですか」という質問の答えとして語られました。彼らの「宗教とはこういうものだ。信仰とはこういうものだ」という固定観念が、神が今なさっていることを分からなくしているという指摘です。ヨハネの弟子たちも、パリサイ人たちも長い間、救い主の到来を待ち望んでいたはずですが。しかし彼らの「こうでなければならぬ」という固定観念によって、目の前にイエス様がいても、彼らは理解することができなかったのです。私たちは今、主がこれから新しく始めようとなされることに対して、新しい皮袋、つまり柔軟な心を用意すべきではないでしょうか。

今諸教会で起こっている変化は、教会の働きが、地域、空間、時間などに制約されなくなる可能性を示しています。今までは、一つの教会の建物の中に、同じ時間に、できるだけ多くの人を集める、ということが重視されてきましたが、礼拝やグループ活動のオンライン化の普及により、教会の座席数、場所、時間、教会員や伝道対象者の居住地などがあまり重要でなくなるかもしれません。言い換えれば、今まで福音を届けることのできなかった人に届く可能性が飛躍的に高まるかもしれないということです。

また同時にこの変化によって、人と人どうしのつながりが今まで以上に求められるようになると考えられます。コミュニケーション技術が発達すればするほど、本当に心を聞いて交わることのできる関係が重要になっていきます。教会でなければ得ることのできない交わりがさらに必要とされるでしょう。主はこの終わりの時、大きな計画を持って、新しいことを始められています。柔軟な心を持ちつつ、神様からの知恵を求め、来るべき収穫の時に備えてまいりましょう。



あとがき

昨年来からの新型コロナウイルスによる感染症の拡大が、第2波、第3波と続き、今年に入って1都3県に出された「緊急事態宣言」が11都府県に拡大し、さらに10都府県に対しては3月7日まで延長するという事態となり、コロナ禍による社会的・経済的な混乱や被害・ストレスは甚大なものとなっています。

そのような状況下の2月14日23時過ぎに、2011年の「東日本大震災」の余震として、福島沖を震源地とする震度6強の地震により、宮城県、福島県等には相当の被害が発生しています。まさに「複合災害」が日本を覆っていると言えますが、皆様にはお変わりはないでしょうか。

発行が少々遅くなりましたが、ここに「日本宣教ニュース第20号」をお届けすることができ感謝致します。今回号の巻頭言は、ローザンヌ委員会や公益財団法人 東南アジア文化友好協会などの働きに加え、日本伝道会議(JCE)の「ビジネス宣教協力の次世代構想」プロジェクトチームのリーダーとして「ビジネス宣教協力、ディアスポラ宣教協力による包括的なアプローチ」に取り組まれている青木 勝氏にお願いして寄稿していただきました。青木氏は、国連や様々な関連団体或いはビジネスの世界の動向などから、ややもすれば時代や社会の動きに無頓着(聖書さえあれば良しとする)で、どちらかと言えば、この世に対する戦略的な思考に欠けがちなキリスト教界に対し、ビジネスマン・マインドを持って多様な情報の発信をされています。

巻頭言からも分かるように、コロナ禍を契機として時代の変化は様々な分野で加速し、「新常态(New Normal)」は着実に浸透していると言えます。従って、私たちは以前の生活には容易に後戻りができない大きな「曲がり角」を迎えていると言ってもよいのではないのでしょうか。

キリスト教界にとっても、この「新常态(New Normal)」をどう受けとめるかによって、今後の宣教や教会形成の在り方、引いては牧師職の在り方等にも大きな影響や変化が出てくるのではないかと思いますし、現状のコロナ禍の混乱がワクチン投与等によって一旦は収束したとしても、その後のアフターコロナの時代をどのように予測し考えるのかが問われるように思います。

ジョン・パイパーが言うように「コロナウイルスにおいて神は、現状に根を下してしまっている世界中のキリスト者を、これまでのあり方から解き放ち、何か抜本的に新しい働きを行わせ、また、世界の未伝の人々のもとに、キリストの福音を携えて送り出そうとしておられる」とするならば、クリスチャン人口0.8%の日本のキリスト教会においては、ジンメルの「橋と扉」の表現を借りれば、今まで内向きに引きこもりがちで、固く閉ざされた「扉」を外に向かって大きく開き、今まで届かなかった周辺の社会やキリスト教シンパ等の「色づいて、刈り入れるばかりになっている」(ヨハネ 4:35)人たちとの間に、いかにして「橋を架け、繋がる」契機となすかが、今後その真価が問われる課題としてあげられるのではないのでしょうか。

そうであれば、そのような時代の変化に対応し、時代のケアをなすためには、今後考えられる状況を予測し、今からどのような対策やパラダイムの変容をなしていったらいいのか、そのために必要となるツールやメディア・コンテンツ、或いはキリスト教界のDX化(デジタルトランスフォーメーション)の検討等を含め、キリスト教会全体に関わる問題として、幅の広い議論が深められ、新たな「ルネサンス」「宗教改革」が起こることを期待していきたいと思います。

最後に余談になりますが、お陰様で2014年にスタートした「日本宣教ニュース」は、今回号で20号となり、一つの区切りを迎えることができました。これまでのご支援やご協力があったからこそ、ここまで続けられてきたことを覚え、皆様には心から感謝いたします。この先いつまで続けられるか分かりませんが、少しでも日本宣教の進展に役立つ情報発信が続けられるように、引き続きご支援とご鞭撻を賜りますよう、よろしく願い申し上げます。
(初穂)

献金者名 (2020年9月～2021年1月)

◎ 尊いご支援に、心から感謝申し上げます。(敬称略)

石井由紀、白井信博、柴田美枝子、渋谷和之、島田治夫、中野覚、花蘭征夫、柳下弘、
日本キリスト教連合会、日本キリスト合同教会、日本聖契キリスト教団、本郷台キリスト教会、

感謝のご報告と継続支援のお願い

日本宣教リサーチ(JMR)は、今年の4月で発足から7年目を迎えます。旧教会インフォメーションサービス(CIS)の支援者の継続的なご支援や、新たな支援者の方々のご支援をいただき活動が支えられて来ましたが、心より感謝いたします。

2021年度も、JEA(日本福音同盟)宣教委員会宣教研究部門の一員として、日本宣教の課題である「次世代育成を育てる宣教インフラの整備」「地域宣教ネットワークの構築による地域宣教の強化」「教会の再生と増殖の道筋の明確化」に取り組むとともに、TCU国際宣教センター「キリスト教葬制文化研究会」の一員として、全ての人に開かれた「キリスト教葬制文化の確立」に取り組んでいきます。

どうか引き続きJMRの働きにご期待くださり、更なるご支援を賜りますよう、よろしく願いいたします。

JMRの活動は、東京基督教大学に寄付される指定献金によって賄われます。会員には一般賛助会員と特別賛助会員があります。各会員の要件と提供される成果物は以下の通りです。

(1) **特別賛助会員**:趣旨に賛同し、支援して下さる教団・教派、宣教団体等

- ・一口30,000円(何口でも)
- ・シンポジウムや研究会・研修会等の開催のご案内
- ・毎年2~4回「日本宣教ニュース」のご提供
- ・毎年1回「JMR調査レポート」のご提供

(2) **一般賛助会員**:日本宣教に重荷と関心を有する個人、教会等

- ・一口2,000円(何口でも)
- ・シンポジウムや研究会・研修会等の開催のご案内
- ・毎年2~4回「日本宣教ニュース」のご提供
- ・毎年1回「JMR調査レポート」のご提供

日本宣教リサーチへの支援金は、税制優遇措置が受けられます

東京基督教大学への寄付金(献金)は、税額控除制度の認定を受けているため、税制上の優遇で還付金が最大で寄付金(献金)額の約50%となります。

詳しくは、☎0476-46-1131(TCI募金係)までお尋ねください

郵便振替口座:00110-5-575648 学校法人 東京キリスト教学園明日の宣教者育成募金

* お振込みの際には、振替用紙に「**日本宣教リサーチ 指定**」と必ずご記入ください。

(振替用紙がお手元がない場合はこちらよりお送りいたします)



東京基督教大学 国際宣教センター

日本宣教リサーチ

【Japan Missions Research】

〒270-1347 千葉県印西市内野三丁目301-5
学校法人 東京キリスト教学園 東京基督教大学 国際宣教センター内
TEL:0476-31-5522 FAX:0476-31-5521 E-mail:jmr@tci.ac.jp
<http://www.tci.ac.jp/institution/fcc/jmr>

日本宣教リサーチ代表 山口 陽一(東京基督教大学学長)

日本宣教リサーチ研究員 柴田 初男